

## 文化10年、鷹見泉石写『魯西亞國字學』

岩井憲幸

### はじめに

ここに紹介するのは、現在古河歴史博物館に蔵される鷹見泉石関係資料中の一書、『魯西亞國字學』（国重要文化財）である。この書（以下時に、Rと略称する）は、小冊ながらわが国のロシア学の基礎をなしたといっても過言ではない価値を有する。奥書により、文化10年（1813）大黒屋光太夫所持本から直接透き写しされたとおぼしい。このことは『鷹見泉石日記』文化10年閏11月14日の条によって裏付けられる<sup>(1)</sup>。

同十四日

一、番丁内薬菌内光太夫方、兼て約束ニ付、魯西亞文字、彼国之書為写罷越候処、借呉候様申聞候付、持帰写取懸候。

ここで言う光太夫所持本が、光太夫が将来したその原本か否か俄かに定めがたいが、後に掲載する写本からも容易に首肯できるところだが、非凡な透写の様から、恐らく原本から直接この作業がなされたと考えられ、よって原本は当時光太夫の手許にあった可能性が高い。だが、今日、光太夫所持本は伝存することを知らない<sup>(2)</sup>。

筆者はかつてRにつき報告を行なったが<sup>(3)</sup>、今回古河歴史博物館よりR全冊の写真掲載が許可されたのを機に、前回の補いとその後判明した事柄を

加筆して再び R を紹介したい。しかしながら、今回の目的の第一は、泉石の精緻な透写による『魯西亜國字學』そのものを多くの人々に見ていただきたいという点にある。

1. R の書誌的事項は次の通りである。

- (1) 書名：魯西亜國字學（表紙直書き）
- (2) 目録番号：鷹見泉石関係資料 B 210
- (3) 編著者：鷹見忠常<sup>(4)</sup> 写
- (4) 成立：文化 10 年 (1813)
- (5) 体裁等：写本 1 冊，横本四目綴じ
- (6) 丁数：墨付 12 丁<sup>(5)</sup>
- (7) 法量：170×272 耗前後
- (8) 奥書：文化十癸酉年初冬光太夫所持之書」忠常寫

以下補記する。R はロシア書の写しを内容とするため、書名と奥書のみが日本語であり、かつ縦書きとなっていて、横綴じ本に装釘される。表紙は白茶色網目空押し模様。表紙の次に白紙袋綴じの遊び紙を、さらに半葉の白紙をおき、ついでタイトルページがくる。これを内題とみなせば次の通りである<sup>(6)</sup>。よって、光太夫将来本は 1787 年モスクワ刊であることを知る。

ПРОПИСЬ/Показывающая красоту/Российскаго письма./Изданная  
въ москвѣ, /1787. Года. [ロシア文字の美しさを示す習字手本。モスク  
ワにて 1787 年刊行。]

タイトルページ以下すべて四周双辺（子持ち枠）で、各右上隅にパジネーションがある。すなわち、タイトルページとその裏の〈献辞〉はそれぞれ〈1〉〈2〉のアラビア数字により、〈序文〉以下は各々〈1〉～〈XXII〉（ただし

〈XIV〉はノンブルなし)のローマ数字によりノンブルを有する。匡郭の大きさはタイトルページにおいて131×215 耗前後。表紙の綴じ糸に伊勢丹の値札用丸紙が括りつけられてあって、その裏には鉛筆書きで〈鷹見様〉とある。さらに表紙の次の遊び紙オのど下に〈40〉と記すラベルが貼ってある。また、今回掲載する写真には撮影されていないが、(3)の奥書部分には次のような付箋がはさみ込まれていた。

三七「魯西亜字學」文化十年大黒屋光大夫所持ノ一七八七年」版ノ書ヲ泉石ノ手寫セシ  
(ママ) (ママ)  
 モノ

これは前当主・故鷹見久太郎氏が本書展示の折に書いた説明書きであろう。

Rはロシア語の本を敷き写しし、その後たとえば1ページと2ページを上下両端のみを糊付けして、和風に1丁に仕立てている。(この場合、光大夫将来本あるいは同所持本の体裁がどのようなものであったかが問題となる。後述参照。)

Rの保存はきわめて良好である。ただ本文に虫損がやや見られる。表紙・裏表紙の前後に袋状遊び紙各1葉を綴じ込み、ついで前遊び紙の次に半葉の白紙があり、タイトルページ・本文へと続く<sup>(7)</sup>。今、透写部分を目次ふうに表示せば次のようである。末尾はページのノンブル、[ ]内は欠。〈 〉は引用。

- |                                     |      |
|-------------------------------------|------|
| 1) タイトルページ                          | 1    |
| 2) 献辞                               | 2    |
| 3) 序文・ことばについて                       | I-II |
| 4) 〈書くために驚ペンを削ることについて、<br>書く姿勢について〉 | III  |
| 5) 〈手の格好と驚ペンの持ち方について〉               | IV   |

6) 〈文字の基本的ななりたち〉	V
7) 〈小文字・数字〉	VI
8) 〈大文字のなりたち〉	VII-X
9) 〈綴り〉	XI-XIII
10) 〈ダビデの息子ソロモンの祈り〉	[XIV]
11) 〈習字手本〉	XV-XXI
12) 〈フランス風書体〉	XXII

再三述べたように泉石の透写は精密かつ徹底している。これは後掲の影印を一瞥すればただちに諒解されよう。泉石は地図等にもこの才能をいかんなく発揮し<sup>8)</sup>、コンパス・定規等の道具立てにも意を注いでいる。一般に当時の普通の写し手がないがしろにしがちなデザインや図柄なども、泉石の場合は丹念に精写されていて、これが後代の研究者にとり極めて有益で、版の異同や年紀の推定・決定に役立つことがしばしばである。とはいえ、Rでは近似の文字——たとえばc/e/o/aなど——を誤写しているケースが若干みうけられる。ほぼ未知のアルファベットを、かくも美麗に敷き写ししているわけであって、これはささやかな瑕瑾と言うべきであろう。

上記項目につき補足する。1) は絵柄や曲線模様まで写していることに注意。2) 侍従ワシーリイ・ペトロヴィチ・サルティコフにより息子たち、セルゲイとミハイルに献げられている。3) のIページ下には刊行者であるアンドレイ・レシエトニコフ、イワン・レシエトニコフ (андрей и иванъ решетниковы)<sup>9)</sup> の名がみえる。モスクワの著名な出版業者である。4) も絵柄に注意。また、ペンにラテン文字大文字が記号として付される。5) の図は当時のわが国の洋学者たちにはよく知られた図であつたらしい<sup>10)</sup>。6) は〈文字のなりたち〉と訳したが、見方を変えれば、筆順を示す。当時のロシア文字筆記体のヴァリエーションが多く示されていることに注意。7) のVIページも同様。8) のVIIページも大文字の筆順。VIIIページは小文字・大文字

の順で上下二段に対照する。IX, X ページは飾りの多い大文字すなわち花文字である。9) 子音 (+子音)+ 母音の種々の綴りをアルファベット順に表示したもの。当時通行した初等教科書風の方式である。各段下に小字で祈りの文章が書かれている。10) の絵柄中，光輪にあたるものが三角形になっていることはおかしいと，前回述べた。だが，後述するユージン・コレクション中の該書でも三角形ゆえ，R は正しく写されていたと訂正する。なお〈ソロモンの祈り〉は，普通いわれる旧約聖書の列王記上 8.22-53 の引用ではない。11) は習字のための短文を列挙する。12) は〈フランス風〉とあるが，目立つのは〈b〉の筆記体を〈b〉よりも丈長に，かつ左肩のカギ無しに書くことであり，他の書体については判然とした差違が認められない。

2. 泉石が透写した光太夫所持本につき，今回は体裁から判断して石版刷りと推定した。しかし，これも訂正しなければならない。銅版刷りである（後述参照）。

以下，光太夫所持本が光太夫将来本と同一であったと仮定して記述を進める（この本を O と略称する）。前回 O と同版本がロシアに存在するか否かは不明であった。現在，モスクワ国立図書館は技術的理由でチェック不能とのことだが，サンクト・ペテルブルクには無いようである。

だが，アメリカ合衆国議会図書館には蔵されていた。しかも同刊年（1787年）本と，後印本（1796年）の2本である<sup>(41)</sup>。ともに Yudin Collection 中に含まれる。さしあたり，前者のみを問題とする（該書を Y と略称する）。また，筆者は実物は未見であり，電子的画像によることを断わっておく。

Y は製本され，その大きさは 21×32 cm。いわゆるアルバム型。中身は銅版刷りで，青色の紙に片面づつ印刷されているという。さらに元表紙を有し，次のメイン・タイトルを印刷する（R に無し）。

РОССІЙСКІЯ/ПРОПИСИ,/СЛУЖАЩІЯ/ДЛЯ НАУЧЕНІЯ ДѢТЕЙ./

правильному и основательному чистописанію./ Изданные и гравированные А. Рѣшетниковымъ,/ 1787 года./ВЪ МОСКВѢ./ Печатано въ вольной Типографіи А. Рѣшетникова. [子供たちに学ばせるための、正しく基礎的な書き方に役立つロシア [文字] の習字手本。1787年、A. レシェトニコフにより出版と彫版される。モスクワにて。A. レシェトニコフの私立出版所にて印刷される。]

次にタイトル・ページが続き、Rと同題・同図である。ただし小異あり(後述)。ここから銅版刷りとなり、紙の裏・表にはっきりと印刷時の加圧痕が看取できる。

Yは中身が、タイトル・ページと献辞は計2葉、序文から本体とすれば、こちらは計22葉。ただしIX, X, XIページの3葉を欠いている。タイトル・ページから最後の葉まですべて、子持ち枠を有して片面刷りされている。ページネーションは、初めの2葉には付されていない(Rは有り)。本体ではR同様、右上隅枠内にローマ数字で〈I〉から〈VIII〉, 〈XII〉から〈XXII〉までふられている。内容は、基本的にRと同じとってよい。

YとRが同じく1787年モスクワ刊であることは上述したが、仔細にみると完全な同版とはいえない点がある。ただし、これはあくまで書誌的な問題であり、内容にはかかわらない。第1は、タイトル・ページが全体として同じであるが、〈ПРОПИСЬ〉の字様が異なる。YはRのXページに載せる花文字に近い字様だが(YではXページ欠)、RはVIIIページの普通の字様である。同じく、Yの献辞中、下から2・3行の〈сергью васильевичу, и михайль васильевичу, салтыковымъ.〉が花文字で書かれるのに対し、Rは普通の字様である。しかも〈михайль〉と綴る(Yは〈михайль〉)。第2に上述のように、タイトル・ページと献辞の葉にノンブルを欠く。第3に〈ダビデの息子ソロモンの祈り〉だが、Yはノンブル〈XIV〉を有し、さらに左上図中、天上の神を下からとりまく雲の下方に、孤状の細字による文章

が書かれる。またさらに、本文冒頭の〈Боже〉の〈Б〉が上述の花文字で書かれている。これに対し、前二者をRは欠く。後者は普通の字様である。他にも小さな差異がみられるが割愛する。いずれにせよ、泉石の書写の態度から推して、省略したり別様に変えたりするとは考え難い。たしかに、敷き写しの方法でしかも未知の文字を対象とした場合、見落としや誤写はありえるが、上記3点は同内容の異版であったとみる方が良いのではなからうか。すなわち、1787年モスクワ刊本には、一部分銅刻を異にする異版があった可能性が高い。

3. 光太夫所持本は元表紙を欠き、タイトル・ページ以下のみの本体部分だけであったか。元来そなわっていたものが欠落したのか否か不明としかいえないが、泉石が借写した時点では存在しなかったであろう。Y同様、片面刷りであったものを泉石は敷き写しによって筆写し、和本仕立てにするために片面刷りの写し2葉を裏・表として貼り合わせ、1丁に仕立てなおしたとみられる。この泉石の精巧な透写本は、光太夫所持本の忠実な精写本と判断してよからうと考える。

4. 光太夫所持本はいったん幕府に召し上げられたであろう。この本により、暦局の人々にロシア文字の筆記体が学ばれ、この本の〈СКЛАДЫ〉の章からロシア語の綴りの構造と日本語五十音の対比研究がなされたであろう。蘭学の素養をもつ人々には、これらの理解と学習・研究は比較的容易であったはずである。

また、時間的にはむろん先行することだが、所持していた光太夫はこの本によりロシア文字を習得し、花文字にも通じていたであろう。

ラクスマンに護送された光太夫らの帰朝は、寛政4年(1792)、將軍家斉に引見されたのは翌寛政5年である。Rが泉石によって透写されたのは文化10年(1813)であるから、この間約20年の歳月が経過している。文化元年

(1804) にはレザノフが再び漂流民を護送し長崎に至って貿易を求め、文化8年(1811)にはゴロヴニーンらがクナシリで捕えられる。後者にあっては、箱館において直接教養あるロシア人たちから、村上貞助・馬場佐十郎・足立左内らが本格的なロシア語学習と研究の好機を与えられるのである<sup>(12)</sup>。

本節冒頭での前者の最初の例は、『北槎聞略』(寛政6年(1794)序)<sup>(13)</sup> 卷之六の〈文字〉に関する項目である。ここには〈魯西亜國字母〉〈反切連綿法〉〈五十韻〉〈數目の字〉が表のように示されているが、第1表の初めのみ活字体で表記され、他はすべて筆記体による。Rのpp. XI—XIII 〈СКЛАДЫ〉は、ほぼそのまま〈反切連綿法〉に引用され、かつ片仮名による読みが付されている。同様の例は、泉石関係資料中にもみられ、『魯西亜字日本音譯』(写本1冊)<sup>(14)</sup> がそれである。曆局員による筆記体学習の成果の好例は、同じ泉石関係資料中にある足立左内書「魯西亜國諺」(天保5年(1834), 1葉)である<sup>(15)</sup>。ここでは諺となぞなぞが2段に分けて書かれているが、文頭に用いられる大文字の書法はRの花文字にそっくりである。『北槎聞略』中の〈五十韻〉は日本語の五十音をロシア文字で表記したものであるが、一方、泉石関係資料中に存する大黒屋光太夫書「ロシア文字によるイロハと数字」(文化10年(1813), 1葉)<sup>(16)</sup> はその名の示す通り、日本語のイロハをロシア文字で綴ったものであるが、片仮名のルビはなく、かつ光太夫独特の書法が色濃くあらわれている。

泉石も自分でロシア文字の手習いをしたようで、足立左内の手と考えられる手本と、泉石の手習い各1葉が、泉石関係資料中に伝存する<sup>(17)</sup>。

光太夫自身は、ロシア文字の書法をきちんとマスターしたらしく、例えば、現在ゲッチンゲン大学図書館アッシュ・コレクションに存する旧光太夫所持の浄瑠璃本裏表紙に書かれた朱筆自署<sup>(18)</sup>、さらに帰朝後命じられて書かされたと推察される「皇朝輿地全図」(国立公文書館内閣文庫所蔵、国重要文化財)<sup>(19)</sup>の細字書入れなどに、そのことがうかがえる。ただし、後に諸処で依頼された揮毫の類は、光太夫独特の癖を反映しただちには読みがたい。上述



した「ロシア文字によるイロハと数字」にもすでにこうした傾向があらわれており、さらに泉石関係資料中の光太夫書1幅（文化10年（1813））<sup>(20)</sup>に至っては、その典型といえよう。むろん、筆による墨書という要素、揮毫という性格もそこには作用したであろう。とはいいいながらも、Rの書法例を一瞥すれば、光太夫の書法の基礎はここにあると容易に推量できるのである。付言するが、光太夫はロシア文字を綴る際、自分でその終了を意識する時、必ず点を打つ。これはおそらくラクスマンあたりから、初学の段階で強く教育された結果であろうと考えられる。日本語世界にしか生きてこなかった光太夫が、西洋語の世界におけるパンクチュエーションの存在——体系としては理解しなかった可能性はあるが——を身をもって知り、かつ学習したものであろう。この語末の〈点〉は、帰朝後も光太夫は終生忘れることはなかった。

## おわりに

馬場佐十郎は幕命を奉じて江戸に至り、大黒屋光太夫から直接ロシア語を習った。文化5年（1808）冬から2年以上の間であったという<sup>(21)</sup>。しかし蘭通辞にして洋学者たる馬場は、光太夫のロシア語知識が国の外交に資するにはあまりにも不十分であることを、ただちに看取する。馬場は幕府に文典と辞書の入手を要請する。奇しくも、この2つはゴロヴニーン事件の出来によって、かなえられることになった。ゴロヴニーンは日本人生徒たちの為に、おのれが暗記していた当時最新の文法書を弟子たちに書き与えた<sup>(22)</sup>。これはロモノーソフの文法書の学校用普及版ともいべきもので、クルガーノフの文典に従うものである<sup>(23)</sup>。馬場たちのゴロヴニーンたちの許での学習は6箇月程であったが、彼らはゴロヴニーンのノートをすぐさま翻訳してしまう。すなわち、今日伝存する『文法規範』6巻である<sup>(24)</sup>。一方、辞典はゴロヴニーン釈放時、彼が所持したタチシチェフの『仏魯辞典』2巻が譲りわたされる<sup>(25)</sup>。日本人の弟子たちはきわめて優秀で、中川五郎治がシベリアからかつ

て持ち帰った種痘書<sup>(26)</sup>を、馬場は『遁花秘訣』として訳出する<sup>(27)</sup>。さらに足立は、光太夫が持ち帰った算数の教科書<sup>(27)</sup>につき、さまざまな質問をゴロヴニンらになして、多くの付箋を原本に貼りつけ、馬場とともに『魯西亜國算学手引草』<sup>(28)</sup>として訳すのである。なお、足立にはロシア語辞書作成の命が下され、この書が成立したとされるが<sup>(29)</sup>、事実は確認できない。

かくて一挙にわが国のロシア学は高い学的水準に達したのである<sup>(30)</sup>。そして、今回紹介する資料『魯西亜國字學』は、わが国のロシア語研究の出発点に位置する、小さなしかし重要な書物の貴重な写しなのである。

#### 注

- (1) 古河歴史博物館編『鷹見泉石日記 第一巻』(吉川弘文館, 2001年) p. 31を見よ。原本縦書き, 引用に際し, 横書きに変更。以下同。
- (2) 幕府天文台蔵書にかかわる諸問題については姑くおく。なお, 文政12年(1829), 光太夫歿後1年, 宇田川榕庵と阿部友之進は光太夫の息・梅陰を訪れ, 〈魯西亜文字の臨本〉を見ている。原本でないことは確かだが, この臨本と光太夫生前の所持本が同一であったか否か, にわかに断じたい。
- (3) 〈鷹見泉石旧蔵ロシア語関係資料若干についての覚書〉, 古河歴史博物館紀要「泉石」第1号, 1990年11月。
- (4) 泉石の名。泉石は天明5年(1785)生まれ, 安政5年(1858)歿。
- (5) 全体の紙数については下記を見よ。
- (6) すべて筆記体だが, 今は活字体に直して引用する。影印⑦参照。
- (7) タイトルページと本文すなわち影印⑦から⑩の部分は, 透写のため薄様紙を使用。その前後に付された⑤⑥, ⑩⑪はこれらと同様の薄様紙各半葉を付す。和本に仕立てるためにさらに前後に付された袋綴の遊び紙(③④, ⑩⑪)は通常の和紙であり, 紙質がことなる。
- (8) レザノフが長崎奉行に贈った「ロシア帝国全図」を, 泉石は文化2年(1805)に写している。その際, 本体はむろんだが, ふつう省略されるカルトゥーシュ付近の細密な図柄まできちんと写しとっている。
- (9) 原文小文字(影印⑨を見よ)。
- (10) 注2で述べた榕庵らもこれに関心を示した。他にも驚ペンをもつ手の図が散見する。
- (11) イリノイ州のThe Newberry Libraryにも後印本らしき版が蔵されている。
- (12) 前者にはムールが, 後者には上原熊次郎が入る。ムールは教えることに熱心

であった。

- (13) 亀井高孝校訂『北槎聞略』(昭和 12 年第 1 刷, 昭和 40 年第 2 刷, 平成元年第 3 刷, 吉川弘文館), 杉本つとむ編著『北槎聞略 影印・解題・索引』(1993 年, 早稲田大学出版部), 亀井高孝校訂, 高野明注『北槎聞略』(岩波文庫, 1990 年)を見よ。
- (14) 注 3 の小文, p. 10 を見よ。
- (15) 同上 p. 8 を見よ。
- (16) 同上 p. 7 を見よ。
- (17) 同上 p. 10 を見よ。なお p. 9 も見よ。
- (18) 朱筆で〈1791 Года/Японцу дайкокуя/Нипонъ Кбдау〉とある。イタリツク体的な書き方で, 〈H〉を〈N〉と書くのが特徴。岩井憲幸〈大黒屋光太夫書蹟資料一覧 — 附参考写真 —〉(明治大学教養論集通巻 292 号, 1996. 9) p. 118 の写真を見よ。なお, 在サント・ペテルブルクの旧光太夫所持『森鏡』裏表紙に書かれたロシア文字もよく知られている。亀井高孝『光太夫の悲恋』(昭和 42 年, 吉川弘文館) p. 42 の写真を見よ。
- (19) 注 13 の前 2 書中の図版を見よ。
- (20) 注 3 の小文, p. 14 を見よ。
- (21) 平野満〈馬場佐十郎のロシア語書簡和解 — ゴロヴニンへ就学以前 —〉「駿台史学」89 号, 1993 年。
- (22) 原本は伝存しないが, 静嘉堂文庫に残る馬場らの翻訳『文法規範』巻一の〈附言〉から, 次のタイトルが知れる。Краткая Грамматика Россійскаго языка для Господъ Японскихъ Переводчиковъ написанная Василиемъ Головиннымъ 1813 Года въ Матмаѣ. これは〈約略魯西亞文範日本譯家諸君ノ為メ千八百十三年元老尹松前ニ於テ誌〉と訳された。
- (23) 中村喜和〈「魯語文法規範」考〉「一橋論叢」第 77 巻 3 号, 1977 年。
- (24) 今日では, 『魯語文法規範』が通名となっているが, そして静嘉堂本表紙にも〈魯語〉の文字が書き込まれているが, これは売り立て時の付加である。元来『文法規範』のみであったろう。参照: 岩井憲幸〈いわゆる『魯語文法規範』について — その成立と書名をめぐって —〉「明治大学教養論集」通巻 217 号, 外国文学, 1989 年 3 月。なお『文法規範』は巻五を欠く。参照: 岩井憲幸〈『文法規範』巻一 — 翻刻並びに注 —〉以下巻二・巻三・巻四・巻六の翻刻と注, 「明治大学教養論集」通巻 379 号, 2004 年 1 月; 同 388 号, 2005 年 1 月; 同 407 号, 2006 年 3 月; 同 413 号, 2007 年 1 月; 同 432 号, 2008 年 3 月。
- (25) 書名は Dictionnaire complet françois et russe, composé sur la dernière édition de celui de l'Académie françoise. Seconde édition [...] par Mr. J. de Tatischeff, Conseiller d'Etat. à St. Petersburg, 1798. Tome I. A-K, Tome II.

L-Z; Полной французской и российской лексиконъ, съ послѣдняго изданія Лексикона французской Академии на Россійской языкъ переведенный. Второе издание [...] Статскимъ Совѣтникомъ И. Татишевымъ. Въ Санкт-петербургѣ, 1798. Томъ I. А-К, Томъ II. L-Z. この本は今日上巻が一橋大学古典資料センター、下巻が静岡県立中央図書館葵文庫に分かれて伝存する。

- (26) 書名は、Способъ избавиться совершенно отъ оспенной заразы посредствомъ всеобщаго прививанія коровьей оспы. Сочинение Медико-филантропическаго Комитета. [...] СПб., 1803. 文政3年(1820)に訳了。さらにのち安政2年(1855)に利光仙庵により『魯西亜牛痘全書』と名づけられて出版された。
- (27) 書名は、Руководство къ ариметикѣ для употребленія въ народныхъ училищахъ Россійской имперіи, [...]. Часть первая. Въ Санктпетербургѣ. 1784 года. この書は、現在早稲田大学図書館に伝存する。
- (28) 東北大学図書館所蔵。
- (29) 「天文方代々記」の足立左内の項参照。大崎正次編・発行『天文方関係資料』昭和40年。
- (30) 日本ロシア文学会編『日本人とロシア語 — ロシア語教育の歴史 —』(ナウカ, 2000年), <第I章 ロシア語事始>のうち<先駆者たち>(岩井執筆)を参照。なお同内容で細かい注を付したものに次がある。岩井憲幸<日本におけるロシア語学習・研究の最初期について — 記述の試み —>「明治大学教養論集」通巻304号, 1998年1月。

### 参考文献

杉本つとむ『江戸時代蘭語学の成立とその展開』I～V, 早稲田大学出版部, 昭和51年～57年。

【謝辞】 なによりもまず、影印掲載の許可を快諾された古河歴史博物館に感謝いたします。さらに、本資料にまで導いて下さった旧蘭学資料研究会の川島尙二先生に御礼を申し上げます。また資料面で、同館の永用俊彦氏、明治大学図書館の久松薫子氏にご協力いただいた。記して感謝の意を表します。

(いわい・のりゆき 文学部教授)